



岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

codjo

O K A Z A K I
C I T Y M U S E U M S | VOL.26
N E W S



エッセイ
ニューヨークのゼロさん

田中吉政と岡崎城下町

アルプと子ども

(収蔵品紹介)
三河国岡崎城之図

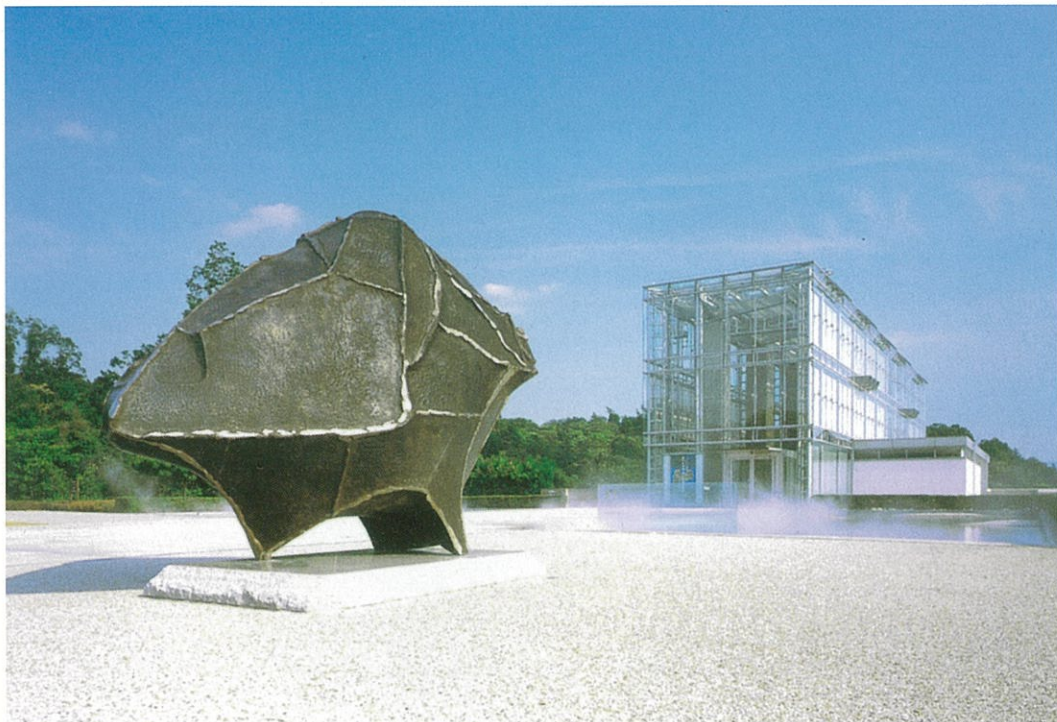
田中吉政像
個人蔵

MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

ニューヨークのゼロさん

館長
芳賀
徹



『メセア』(1999) 269×177×386cm

ゼロさんとは、彫刻家ゼロ・ヒガシダ氏のこと。岡崎市美術博物館の前庭に威風を誇る大彫刻『メセア』をつくった人だ。

猛進する犀のような、また一方から見ればキリストの顔のようにも見えるこの作品も、いまでは当館来館者たちにすっかりおなじみになっているはずだ。お天気のいい休日など、子どもたちがこの犀の脚の下のすきまをくぐりぬけて遊んだりしている。若者たちは犀の背中にセーターをあずけて、そのまわりでスケートボードを走らせたり、小型自転車の曲乗りの練習をしたりしているのもよく見かける。

この『メセア』は、いまからちょうど5年前の平成12年2月、岡崎市ライオンズ・クラブが結成40年記念に当館に寄贈して下った。作品の設置にあたっては、作品の前でクラブの方々が大勢そろって花やかな式典がおこなわれ、作品といっしょに記念写真も撮ったものだった。ライオンズ・クラブの、どちらかといえば保守的な趣味のはずの人々が、この異形の巨大抽象彫刻を文句もなく受け入れてくれたばかりでなく、面白がり、よろこんでくれたことに、作品選定に当たった私たちはほっとしたことを覚えている。

クラブからの記念寄附の申し出を受けて、東京に作品を探しに行ったのは、当館学藝員の村松和明氏と私とであった。はじめから、館の野外に置ける彫刻作品を、という狙いはあったが、あちこちの画廊をめぐるもなかなかいい作品が見つからない。小都市の駅前などに置かれて埃まみれになっている母子像とか、平和を祈る裸婦の像とか、丸と四角の組み合わせの一見抽象風の彫刻とか、ああいう俗悪陳腐の作品だけは選ぶまい、というのが私たちの考えだった。

村松氏と私は、最後に、恵比寿のガーデン・プレースの一角にある現代彫刻センターに立ち寄ることにした。センターとはいっても彫刻を専門に扱う画廊である。そのセンターに入ろうとして、ガラスの壁越しに中をのぞいた時、私たちの眼を奪ったのが、ゼロ・ヒガシダ氏の大彫刻だった。ちょうど、ゼロ氏の個展が開かれていたのである。何国人なのかもわからないこの異様な名の作家を、村松氏も私もこのときまでは知らなかった。

センターの中に入って、高さは3メートル近く、幅は一番長いところで4メートル近くもある作品を、私たちは見上げ、ぐるっとまわりを廻ってさわってもみた。彫刻の外側は、ステンレススチールの板を何枚も、叩き鑿^{のみ}で叩いた上で張り合わせて溶接してあるが、内部は鉄骨を組み合わせた上で、コンクリートを詰めこんであるという。この巨大な重量感が、見てもさわっても私たちに圧倒した。そして、重厚なこの量塊のどこにも、円とか四角とか三角とかの単純な幾何学的な形態はない。どの面もいびつでありながら、がっしりと統括され、統一されて、外への圧力を放ち、内への集中力を感じさせる。3本のとんがった足で立ち上がって、長い背中に磔刑台上のキリストのような表情を見せ、頭はずんぐりともたげて宙に向かって咆哮している。あるいは祈っている。

私たち二人はたちまちこの作品が気に入って、この作品に魅せられて、これをライオンズ・クラブ寄贈作品に選ぶことを決めたのであった。センターの学藝員の説明によると、作者ゼロ・ヒガシダ氏は、1958年広島生まれの日本人で、日米の間を往復し、ニューヨーク近郊と広島で制作を続けている若い作家だということだった。メシア(救世主)とメッセージとの二語を組合わせて作った題名だというこの『メセア』は、やがて岡崎に運

ばれてきて、クレーン車で苦勞をした上でいまの場所に据えつけられたのである。

このゼロさんの、アメリカでは二年ぶりの彫刻個展が、ニューヨークのロバート・スティール・ギャラリー (Robert Steele Gallery) で本年の9月15日から一ヶ月間開かれるという。そのことをゼロさんから聞き、その個展カタログのために小文をも書いた私は、ちょうどオープニングの前日からニューヨークにいた。ワシントンの国会図書館内で毎年のクルーゲ・センター学術審議会が9月12、13日に催され、アジアからの委員としてそれに出席した私は、終るとすぐにニューヨークに出かけた。そして15日、午後いっぱい新装なった近代美術館で過ごし、ポロックやクリフォード・スティールやロスコに堪能してへとへとになったが、夕方、ホテルに帰ってシャワーを浴びてからゼロ・ヒガシダ新作展に出かけた。

マンハッタン西南部の西25番街511番地というあたりは、私にとってははじめての界隈だった。R・スティール画廊は、ビル全体が画廊の集合体になっている建物の1階にあった。近づく、すでに着物姿の日本女性が何人か出入りしている。ゼロさんが、「やあ、せんせい!」と言って飛び出してきた。久しぶりの面会だった。相変わらず鼻の下にちよびひげを蓄え、頭は髪の毛が三角にとんがっているが、顔は小児科のお医者さんのように柔和な好青年である。

高い天井の下に、これもまた大作ぞろいの圧倒的に強く美しい展覧会だった。岡崎の『メセイア』を裸にして鉄骨の複雑なからみあいの構造だけにしたような『ニルヴァナ』という巨大作が真中に屹立している。これだけでも2トン半の重量だという。ゼロ氏はこれを広島の自宅工房で制作し、船でニューヨークに運んで、辛うじて数日前に画廊に到着、二つに分れた部分を、さきほど、1時間前に、画廊主のスティール氏とともにこで持ち上げて組み合わせただけだという。スティール氏はなるほど、重量挙げもできそうな、腕っぷしの強い好漢だ。

全部をステンレススティールで覆った、アフリカ黒犀のように強靱なアニマル風の作品もすぐ側に立っていた。惚れ惚れとして、その全身を撫でまわしたくなるような凹凸と肌合いをもつ。スティール氏は、これが好きだといって、しきりにこのアニマルの首すじを愛撫していた。スティール板を叩き、磨き、削り、熔接したものを、縦に3枚、横に6列連結させた『ラスト・サバー』という平面の大作(3m×6m)——これも画廊の一方の広い壁面を掩って、複雑な乱反射を放っている。

われらが岡崎美博に数百万円の金がありさえすれば、この『最後の晚餐』もぜひ購入して、あのエントランスホールのアブラモヴィッチの巨大椅子の向い側あたりに飾りたいとさえ思った。

黙々として鋼鉄を切り、曲げ、焼き、組合せ、熔接し



「ニルヴァナ」(2002-2005) 266.5×389.5×196.8cm

て、さらに叩き、表面に傷跡をつけ、磨いて、これらの重厚な大作をつくりつけてやまない彫刻家——ゼロ・ヒガシダ氏はいったいなにを思い、なにを願い、なにを祈りながら、この困難な作業に打ちこんでいるのだろう。それを日常の言葉では表現できないからこそ、彼は熔接の火花を散らして鋼鉄に挑む。修験者風ともいえるほどのこの難行への没頭をとおして、ヒガシダ氏は、私たちの小さな自我をはるかに超える大きな力、深い暗い生命を予感し、それをたぐり寄せ、ついに作品として私たちの前に立ちあがらせたのだ。

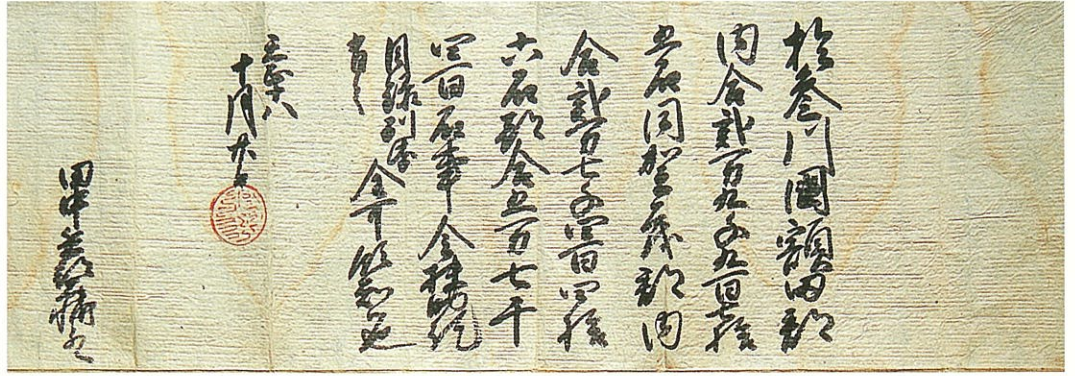
天の岩戸を押し開いた天手力男命のような人が、この柔和な笑みを見せる彫刻家なのかもしれない。ヒガシダ夫人もその御母堂も美しいかたで、お二人がつくったおすしと日本酒をふるまわれながら、私は画廊のなかをなんべんも廻って作品を撫で、みつめた。小品の何点かにはもう売約済の赤丸がついていた。



「ラスト・サバー」(2005) 300×600×20cm

田中吉政と岡崎城下町

学芸員 堀江 登志実



豊臣秀吉朱印状 田中吉政宛 柳川古文書館蔵

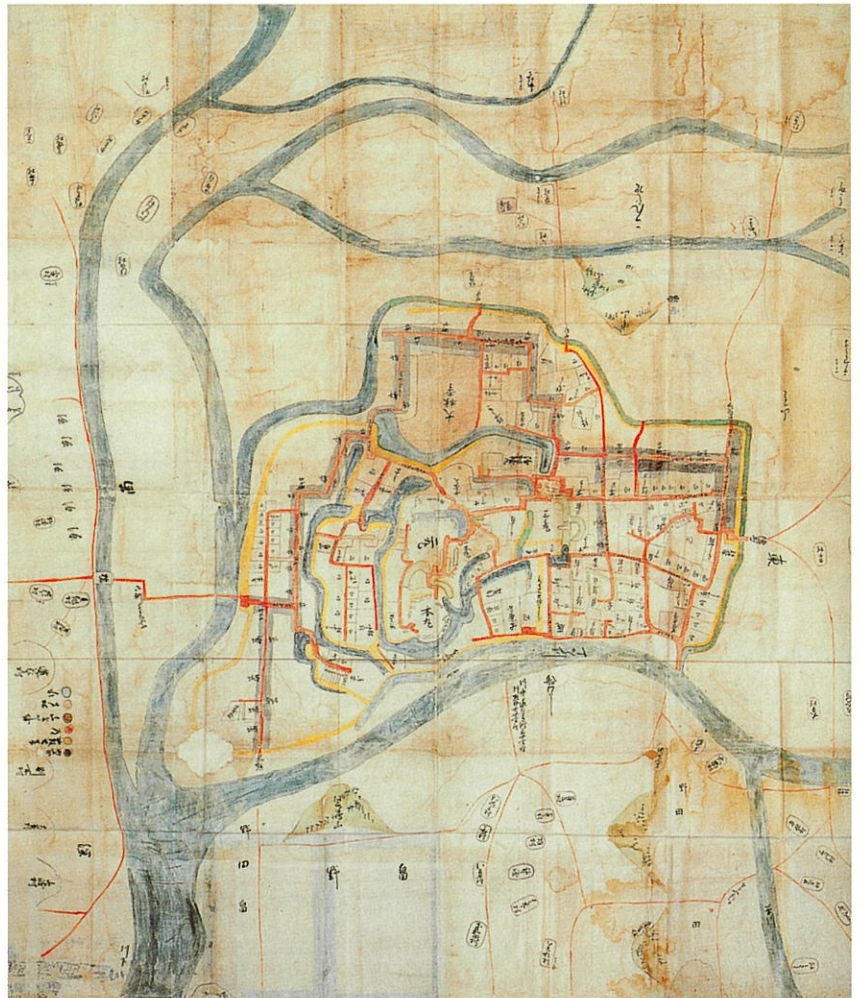
企画展「田中吉政とその時代—岡崎城下町を創った豊臣武将の生涯を追う」で、構成テーマの一つとなるのが、吉政の城下町建設である。吉政が岡崎城主であった天正18年(1590)から慶長5年(1600)までの約10年間は、中世から近世にかけて大きく歴史が転換する時代である。諸大名により城下町建設が積極的に行われ、それが町の基礎となり現在の都市に発展しているケースが多い。吉政時代の岡崎城もこの例にあてはまる。

田中吉政は、城西には沼地を埋めたてて田町・板屋町を造成し、城北には台地状の天神山を削りとり材木町を取り立てたといわれている。そして、旧来から城東にあった連尺町などと結び、一大城下町を築いたのである。吉政以前の徳川家康領有時代、すでに城に付属した町として連尺町が存在していた。江戸時代、連尺町は城下19か町のなかで一番上席に格付され、町年寄が同町から伝統的に選出されたのも歴史的な古さによるものである。吉政は連尺町を中心に西へは材木町へ、東は籠田町へと連なる町を造成したと考えられる。

吉政はこの造成した城下町と城を囲む惣構を築く。惣構は堀ま

たは土塁により構成される。図でもわかるように、惣堀は城の北と東に巡らされ、西と南は河川が惣堀の役目を果たしていた。また、土塁は惣堀の内側に造成され、ほぼ城全体を廻っているが、2箇所ほど土塁を欠いている。六地藏町の南の菅生川沿いと肴町の東側である。これは、たぶん河川を利用した物資輸送にかかわる場所であったためであろう。六地藏町は、近世には菅生川からの荷揚げ人足で伝馬町とともに特権を有した町であった。

吉政の総構構築にはどのような意図があったのであろうか。第一は城郭防衛であろう。近世の籠田惣門の橋が6間あったとされるから、惣堀の幅もその程度とみ



三州岡崎図 西尾市岩瀬文庫蔵



岡崎城出土遺物 岡崎市教育委員会蔵

の三の丸東馬出築造にはじまり、大林寺南の堀・白山曲輪の造成は、城の中核区域である内郭と、町屋・侍屋敷の外郭を峻別するラインを形成するものであり、これらは、慶長6年徳川氏による伝馬制度整備にともなう東海道交通に対応して本多氏がとった城郭防衛策である。吉政時代においても東海道に対して無防備であるはずがなく、なんらかの策が施されたとみられるが、あえて城内に東海道を引き入れたことの英断は、城下町の繁栄への道を切り開いた吉政の功績として評価されねばならない。

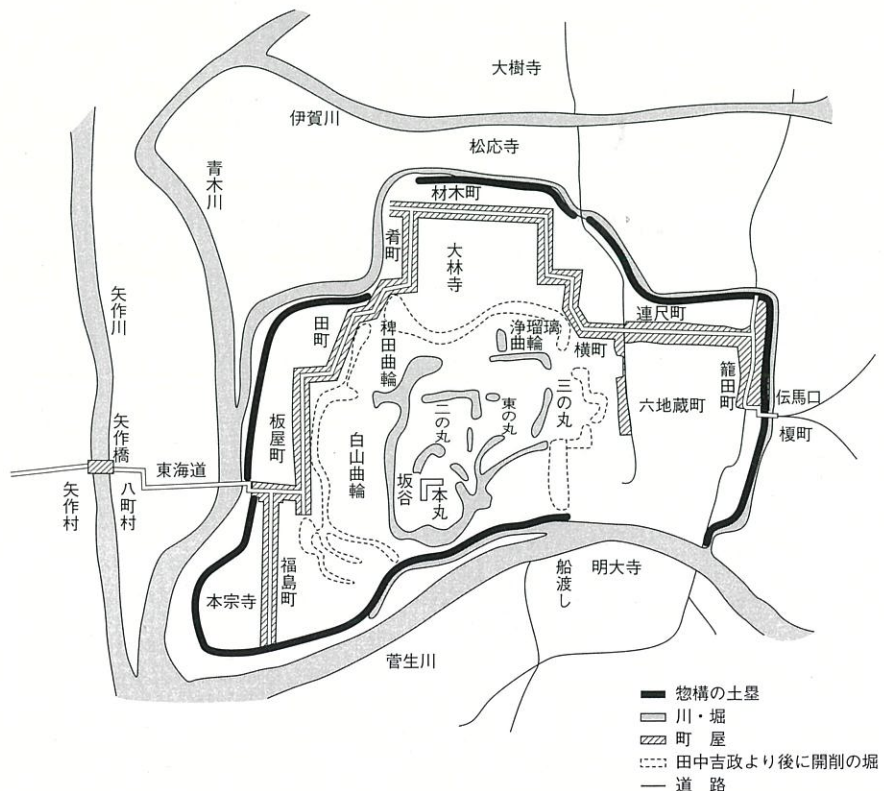
このほか、城下町の問題では福島の本宗寺を中心とする寺町構想をとりあげねばならない。吉政は本願寺一家衆寺院である本宗寺を福島に移転させ、さらに真宗寺院の三河三か寺（上宮寺・勝鬘寺・本証寺）なども本宗寺のまわりに移し、真宗寺院の寺町・寺内町を造ろうとした。

られるが、さらに内側に土塁を築くことによりその防備を固めたのである。城だけでなく商人・職人を含む町までを守備範囲としていることに、従来の城にない惣構の思想がある。第二に城下町の特権区域設定の意図を考えたい。古くは連尺町町人8人が家康出陣の折に菅生口御門堅めを命じられ、以降諸役免許を同町が与えられたというが、当時、惣構内の福島に移転を命じた本宗寺寺内に対しても諸役免許を吉政は保証している。吉政により造成された新規の町々にも商人の定住を促す意味で諸役免除、地子免除、伝馬役免除が保証されたことは十分に考えられ、惣構はこの特権を有する町区域を示すものと考えることができないであろうか。吉政の後の本多康重の時代まで伝馬役を負担したのは、惣構外の榎町（現在の祐金町）や八町村であったこと、また、伝馬役を負担する伝馬町が惣構の外側に後世造られるのもこの惣構内に位置する町の特権をふまえてのことであろう。

吉政はさらに、東海道をこの惣構内の町屋に通した。それまでの東海道は菅生川南を通過していたとされるが、吉政は岡崎城内に導き入れたのである。後世いわれる二十七曲がりの発端となるものであるが、惣構のなかの町屋部分を紆余曲折しながら城を巻き東西へと通じるようにしたのである。その意図は、交通・流通による城下町繁栄にあると見られるが、反面、城郭防衛が大きな課題となったとみられる。しかし、現在のところ吉政が東海道から城内を防衛するために城郭改修を行ったという形跡がない。東海道を意識した城郭改修は田中吉政の後の本多康重の時代になってからである。慶長7年

これは、吉政が真宗門徒であったということではなく、三河本願寺の宗教勢力を利用して城下の繁栄を意図したものであった。これは豊臣秀吉の大坂城の例と共通する政策でもある。しかし、本宗寺は移転したものの三か寺は移転せず、吉政の構想は完全な実現をみなかった。

吉政時代の10年間は、徳川家康が岡崎城を実質的に領有した永禄3年（1560）から天正18年（1590）までの30年間と比較すれば短い期間である。しかし、明確なる都市計画をもって積極的に城下町づくりがなされ、それが近世の岡崎の繁栄をもたらした現代に至っていることをみれば、その基礎を築いた吉政の功績は家康以上に評価されねばならない。



アルプと子ども

学芸員 千葉 真智子

当館では、今夏開催した「ハンス・アルプ展」の折に、少しでも夏休み中の子どもたちに展示を楽しんでもらおうと、ちょっとした試みを行った。

その一つが、子ども向けのワークシート「わくわくシート」を用意し、クイズに答えながら作品について考えてもらおうというものである。近年、こうしたワークシートの作成は、各美術館・博物館が積極的に取り組んでいることの一つであるが、その活用方法に関して言えば、来館者任せという場合が多く、実際どれくらいの割合で利用されているのか、どのような答えを書いているのか、把握できていないというのが現状であろう。そこで、大変なことは承知の上で、当館では次の二つの事を実践することにした。

①会場入口で必ず子どもに声をかけ、鉛筆と下敷き用ボードと共に、シートを手渡す。

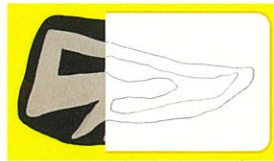
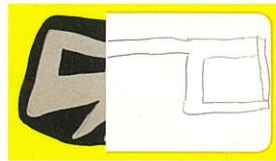
②会場出口にポストを設置し、住所・氏名を記入した上で、シートを投函してもらう。その全てに目を通し、後日、コメントを添えてそれぞれに返送する。

毎日投函されるわくわくシートを見ると、こちらが気づかなかったような本質的な視点にはっとさせられ、また子どもたちの発想の豊かさに驚かされることが多々あった。そして、このことは翻って、アルプの作品がいかに様々な見方を可能にしてくれる、魅力に充ちたものであるかを再認識させてくれた。

子どもたちへの返事については、何をどのような言葉で書くべきか戸惑いもあったが、自由なアルプの作品に相応しいものになるよう、できる限り楽しく、また子どもたちの率直な感想に真摯であろうと努めたつもりである。この返事を受け取った子どもたちが少しでも喜んでくれたらと願っている。

反応はこんな感じ

● 《鳥の仮面》の右半分を想像して描いてもらう。リボンのような左右対称の形を描く子が多い中で、時にこんな絵も。



《鳥の仮面》

● 《貝殻と頭部》が何に見えるかを考えてもらう。「蛇」「赤ちゃん」「頬杖をつく人」など様々な意見が。

また、別の角度から見た場合も考えてもらう。すると「かじられた2つのリンゴ」といったポエティックなものや「アンニオ猪木」といったユニークなものも。



ほくといっしょに考えよう!

この作品の名まえ： はハエに似ている
 にあてはまることは、何か?
 作品を見つけて、なまえを完成させよう。

この作品を見ると、どんな感じがする? 教えてね。

アルプは、「人とハエは似ている」と言いました。
 なぜだと思おう?

この絵は、ある作品の左半分です。
 右半分を想像して描いてみよう!



何に見えるかな?

こっちから見ると、どうかな?



いろんなところから見てみよう。何に見えるかな?
 作品に好きな名まえをつけてみよう!

なまえ

● 《人は蜂に似ている》を見て、どんな感じがするかを問いかける。「きれい」と答える子もいれば、全く反対に「汚い」「暗い」と答える子も。人によって感じ方が全く異なることを再認識。ほかにも、「ぐちゃぐちゃした感情にとらわれて、抜け出せない感じ。」など、思わず納得してしまうような意見も。

● 「この作品を探してみよう!」として通常カタログで目にするのとは別角度から撮影した作品写真をもとに、《キプロス風彫刻》を探してもらう。さらに各自オリジナルのタイトルもつけてもらう。「魚」「かえる」が圧倒的だが、なかには「ウルトラマンシャーク」「宝の山」「かえるはわかめに似ている?」なども。

追記

もう一つの子ども向け企画についても少々。7月30日、5組の家族と一緒に、半日かけてアルプの作品を楽しむ「親子で楽しむアルプ展」を開催し、次の順に3つのことを行った。

- ①触る—アルプの彫刻のもつ独特の丸みを感じてもらうために、当館所蔵のアルプの作品を、手袋をした手で触ってもらう。
- ②見る—わくわくシートを使いながら、アルプの作品と一緒に鑑賞し、その後、好きな作品を紹介しあってもらう。
- ③作る—アルプのコラージュ作品を再現してもらい、さらに、その上に好きなように色を塗ったり、色紙を貼ったりして、自分だけのオリジナル作品に変身させてもらう。

触るという体験は、普段禁止されているだけにみなかなり興奮した様子であり、また、みんなそろっての鑑賞は、他人の意見はもちろん、自分の子ども、逆に自分の親の意外な好みや感じ方を知る機会にもなった。



そして、最後の制作については、子どもたち以上に真剣になってしまったご両親もいたが、それもまた楽しく、出来上がった作品にサインを入れ、タイトルをつけてもらい楽しい一日が終った。

初めてのことで、反省すべき点もあったが、直接、来館者と触れ合うことのできるこうした機会を大事にし、次につなげていきたいと感じた。

所蔵品紹介

学芸員 浦野加穂子

「三河国岡崎城之図」 江戸時代中期

本図は水野家が城主を務めた時代(1645～1763)の岡崎城下を描いた絵図である。

近世の岡崎城下町は、企画展『田中吉政とその時代』の豊臣武将・田中吉政によりその基礎が創られた。天正18年(1590)家康の関東移封にともない岡崎に入部した吉政は、城郭の東北西の外周に惣構(惣堀)を巡らすとともに、東海道を城下に引き入れ、板屋・材木町等を新設、旧来の連尺町などにも一大城下町を築いた。

江戸時代には譜代大名の本多家—水野家—松平家—本多家が城主を務め、本多家時代(1601～45)には、城の東に馬出しを造り、城の北側に堀を、西側にも白山曲輪を築いて、整備が進む東海道に対して城の中心部の防衛を図るとともに、籠崎堤を築いて菅生川を南へ移すなどの城郭整備が進められた。

本図が描かれた時代の水野家は本多家の倍近い家臣団を抱えていた。5頁の本多家時代(1769～1871)の絵図と比較すると本図には菅生川南岸、城西南部の福嶋、惣堀の外周沿いの能見・六供等にも組屋敷が広がり、武家屋敷の増設に務めた状況が良く表れている。

また本図には250近い屋敷地に居住家臣名や組屋敷・小役人屋敷等の別が記載され、当時の屋敷配置を知ることができる。家臣は身分に応じて藩より屋敷を割り当てられ、屋敷替えは家中統制、支配の一環として行われた。岡崎城内では二の丸に藩主の居館が置かれ、三の丸や備前曲輪等に老中などの重臣、新たに造成された菅生川南岸や惣堀沿いには下級武士が配されている。

本図は勝海舟旧蔵本と伝えられており、制作年代は記され

ていない。図中の備前曲輪に「二本松右中」の名があるが、二本松家において岡崎在任中に「右中」と称したのは二本松義元のみであり、義元は宝暦8年(1758)に「右京」から「右中」に改称している。このことから、本図はそれ以降で水野家が肥前唐津へ転封する同12年までの間の状況を描いたものとみられる。この他本多家時代(1769～1871)の重臣中根家に水野家時代の屋敷割を示した絵図が伝来している。本図とは家臣名、屋敷割等の記載内容、寸法ともほぼ一致するが、中根家本は無彩色である。大名の転封時には移住先に身分相応の屋敷を配置する必要があり、前藩主時代の屋敷配置図などを参考にした。中根家本は岡崎入部時に用いられたものであろう。

城絵図は城郭の変遷、ひいては岡崎の歴史を物語る重要な史料であり、当館では今後も収集と研究に努めていきたいと考えている。



INFORMATION

■展覧会スケジュール

2005年10月22日(土)～12月4日(日)

田中吉政とその時代 —岡崎城下町を創った豊臣武将の生涯を追う—

田中吉政(1548-1609)は、近江生まれ、戦国時代から江戸初期を生き抜き大名となった豊臣武将です。秀吉の甥の秀次に付けられたのち、天正18年(1590)には大名として取り立てられて岡崎城主となります。城と城下町の造成、矢作川築堤など大きな足跡を岡崎に残しています。本展では、吉政を三河時代のみならず、近江時代、筑後時代など生涯を通じて紹介することにより、その人物像に迫ります。

2005年12月17日(土)～2006年2月5日(日)

大原美術館展 —古典になった前衛たち— ルノワール、セザンヌ、マティスからフォンタナまで

国内最初の西洋美術館として1930年(明治5)に岡山、倉敷に創設された大原美術館は、その長い歴史から、古典的な美術館というイメージが強いかも知れません。ところが実際には、その収集作品のほとんどが同時代の優れた作家や前衛的な視点を持った精鋭たちの作品だったのです。この展覧会は、その意欲的な収集眼によって集められた、今では古典となった才気あふれる名画、約70点を一堂にご覧いただきます。

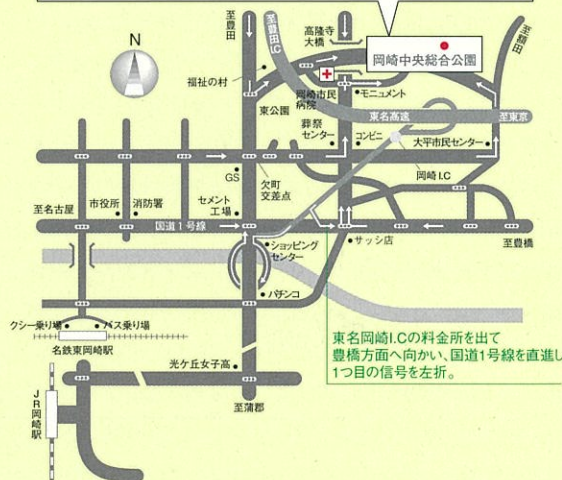
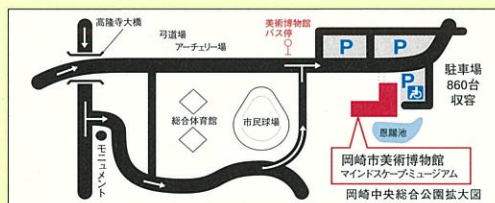
2006年2月11日(土)～2006年3月26日(日)

新収蔵品展

岡崎市では、美術館・博物館資料として美術品や歴史資料等の購入を毎年行っています。また、多くの方々のご協力により寄贈や寄託の受け入れも進んでいます。本展では、新収蔵品をテーマに、平成16・17年度において新たに収蔵された美術及び博物館資料を紹介いたします。

- 開館時間／午前10時～午後5時(10月1日～3月31日)
午前10時～午後8時30分(6月～11月までの土曜日)
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
- 休館日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない)
年末年始(12月28日～1月3日)
※展示替えのため臨時休館することがあります。

- ◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
(名鉄バス)「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
- ◎タクシー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
- ◎自家用車／東名高速道路・岡崎I.Cから約10分



OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース／アルカディア】

- Arcadia 第26号 ●2005年10月発行
- 編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

岡崎市美術博物館

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1 岡崎中央総合公園内

TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.htm>

秋本番を迎え、来年度に向けた予算編成事務がはじまりました。ここしばらくは数字との戦いです。そんな慌しい中、館長はじめ各担当のみなさん原稿ありがとうございました。(I.M)

